

超音波研修委員会研修会

日時：平成30年7月7日(土) 14:00～16:00

場所：良陵会館 大会議室

1. 教育講演「腹部エコーでみつける消化管疾患」

嶋 二郎 (川崎医科大学検査診断学)

司会：小野寺博義 (宮城県対がん協会がん検診センター)

2. ライブデモ

講師：嶋 二郎 (川崎医科大学検査診断学)

超音波研修委員会研修会 教育講演
「腹部エコーでみつける消化管疾患」

畠二郎（川崎医科大学検査診断学）

機器性能が格段に向上した現在、「消化管はエコーで見えない」という概念はもはや一般的とは言えない。音響窓さえ確保されればどのような病変でも見えるはずであり、消化管においては実際にガスが原因で見落とされた症例は非常に少ない。

けんしんは基本的に無症状の受診者を対象とし、消化管では早期癌の発見が主たる目的であるが、超音波による消化管早期がんのスクリーニングは容易ではなく我々の成績も良好とは言えない。一方で無症状ではあるが進行癌を有する症例も少なからず経験され、その超音波による検出能は比較的良好（検者全員の平均で概ね 80%程度）であることから、超音波けんしんにおいて消化管を観察することは無意味ではない。

良好な検出能のためには漠然と腹部を走査するのではなく、消化管の解剖に基づいた系統的走査が必須である。その基本は腹部食道、十二指腸、上行ならびに下行結腸、そして直腸とほぼ決まった位置に存在する部位を確実に同定し、その間にある管腔を追跡することであり、習熟すれば 1 分程度で胃・十二指腸球部と大腸をスキャンすることができる。

消化管のスクリーニングにおいては病的肥厚をとらえることが中心であるが、層構造その他を評価すれば診断も可能であり、進行癌を他疾患と誤診することは我々の経験上皆無に等しい。同時に超音波は腹腔内全域が観察可能であるため癌のステージングもその場で可能であり、治療方針決定上も有用である。

進行癌以外にみつける消化管疾患は腫瘍性・炎症性ともに多岐にわたる。粘膜下腫瘍も消化管の部位を問わず検出や診断は可能である。中でも超音波が得意とするのは急性炎症性疾患であり、肥厚の範囲が広いことや内腔にガスが存在しない場合が多いことなどからエコーによる検出は容易である。本講演では系統的走査についてライブデモンストレーションとともにその概略を述べ、エコーでみつける代表的疾患の超音波像についても紹介する。

司会：小野寺 博義（宮城県対がん協会がん検診センター）